



オウムは1989年の総選挙で公職選挙法で確認団体の認定を得るために25人の候補を立てて惨敗、供託金を没収された。その後ロシアに進出、これにより一層資金が必要になり、無理な、お布施や出家を推奨するようになっていた。

95年2月28日午後、目黒公証役場事務長の假谷清志さんが品川区上大崎の路上で、7～8人の男性によってワゴン車で拉致された。目黒公証役場は元裁判官だった実姉の夫が開設したものである。腰痛に悩んでいた実姉は夫が亡くなつた後、ヨガ教室の指導者の勧めで多額のお布施をしてきたばかり

1994年6月の松本サリン事件、1995年3月の地下鉄サリン事件に象徴される一連の無差別大量殺人・拉致・勧誘・監禁。オウムが引き起こしたこの恐怖の事件が、時の流れの中で私たちの記憶から薄れかけてはいいか。私たちは忘れない。この教団の非合理性、暴力性、幼稚さ、詭弁のすべてを。前号の「坂本弁護士一家殺人事件」に引き続いて、私たちはこのオウムの罪をシリーズで追いかけます。二回目の今回は地下鉄サリン事件の重要な引き金となつたオウムの悪辣な資金集め目的の「目黒公証役場事務長拉致・監禁・殺人事件」を追います。

あの時を忘れない Vol. 2

目黒公証役場の事務長が 拉致・監禁・遺体を焼却された

李公寔集

鳥山地域オウム
真理教(現アレフ)
対策住民協議会

か、一切の財産を寄付して出家すると
言いだしていた。

検査攢乱と隠蔽工作

假谷さんはこれに不安を感じ、強く反対し、「完全に縁を切るよう」に勧めていた。拉致実行者の一人松本剛は拉致に使用するレンタカーを借りる際、申し込み書類に指紋を残すミスをしてから、十万円は公表で逃亡資金を送

その恐怖を家族に語っていた
残酷！レンジで遺体を焼却

資金集め、各地でトラブル頻発
この他にもオウムの偽装、法違

「ハフの会員権のこと話したい」と女性の居場所を探りに来ている。このことがあってから假谷さんにオウムの運行がつき、ついには事務所の出入りで見張られるようになり、假谷さん

を数回投与され昏睡状態に陥つたあと、翌朝死亡した。教団は假谷さんの遺体を電子レンジに応用されている電磁波を使つた焼却装置で焼却していく。

反対し、「完全に縛を切るよ」とは」籠めていた。拉致実行者の一人松本剛は拉致に使用するレンタカーを借りる際、申し込み書類に指紋を残すミスをしているが、オウムは松本に逃亡資金を送る一方で、金沢市の潜伏先には林郁夫（事件後に逮捕）の指紋をベタベタ残し、指紋検出捜査を攪乱するなど教団を挙げて隠蔽工作を重ね、捜査の手が迫ると今度は慌てて捜査攪乱を狙つて地下鉄サリン事件へと突き進んだのである。オウム側は例の通りこの事件を「デツち上げであり、国家権力による宗教弾圧だ」と主張していた。

事件の残酷な全容が明らかになつた。假谷さんは拉致直後、上九一色村の団本部に監禁、実妹の居場所を吐かせる目的で治療省・林郁夫と中川による自白剤＝麻酔剤「チオペンタール」

(参考文献) 江川紹子著「オウム真理教」追跡2200日、毎日新聞)

地下鉄サリン事件8年を経過して

3月20日で、地下鉄日比谷・千代田線の電車内に、オウム真理教によつてサリンがまかれて8年目を迎えた。

12人が死亡、約5,500人が負傷するという、日本の犯罪史上の中でもまれに見る凶暴で残忍な事件であった。今なお後遺症で苦しんでいる被害者が多数いる。被害者の支援活動をしている「リカバリ・サポート・センター」の検診結果でも75.7%が「目が疲れやすい」、43.5%が「体が疲れやすい」、「頭痛がする」も42.8%にのぼる。被害を受けた事も言え

ず、会社で「怠け」だと見られ孤立している被害者もいます。何の罪もない人々がある日突然、身体に異常をきたし、自分の思うような生活をする事もかなわなくなってしまう。多くの被害者の心の中は、はかり知れない怒りでいっぱいだと思う。

先日の裁判で麻原彰晃は、被害者の気持ちを逆なでするような態度を裁判所の中でとり続けている。被告人証言でも裁判長の再三の呼びかけにも一切耳を貸さず、終始無言で通すという最悪の口吐き。

一切耳を貸さず、絶対無言を押し通すという愚挙に出た。私達、烏山地域オウム真理教対策住民協議会は、オウム真理教が過去に犯した犯罪を風化させてはいけないと考え、「住民協議会ニュース」の中でも、オウムが犯した様々な事件を連載で取りあげている。

昔に戻りつつあるオウムを、私達は絶対に許さない。「世田谷区にオウムはいらない」「日本にオウムはいらない」の声を大きくし、一連のサリン事件の被害者と連帯し、国に対しても被害者の救済を含め、要求するものです。

烏山地域オウム真理教（現アレフ）対策住民協議会

を隠すことを甥に相談している。オウム側は公証役場に假谷さんを訪ね、「ゴ

オウム裁判、開かれる

地下鉄サリン事件から3月20日で8年が経ちます。あの時事件に出会った、地下鉄職員・警察官・乗客として被害を受けた人々、多くの当事者が語り継ぐ「その日」、そしてその影でもっと多くの人たちが、被害を受け事件と関わっていたのを知ることは少ないでしょう。被害者が運び込まれた病院の医師や看護婦も被害にあったのです。そもそももっと知られていないのは、病院で行われた治療で被害者や医師・看護婦の衣服や所持品・白衣などサリン混合液の染み込んだ汚染物はビニール袋で200個、約5トンにも上ったのです。

それを命がけで処理した人が居たことをつい最近になって知りました。もちろん自分の身に異変が起きていたこともつくづくわえなければなりません。

国際情勢が不安定を増し、戦争が行われ生物化学テロの脅威が現実味を帯びているのが世界の情勢です。あのオウムが行った殺人行為事件は決して許すべき事ではない。まして風化させてはいけないのです。

横浜から連帶のお手紙（その3）

～坂本弁護士一家惨殺事件に寄せて志賀さんからお手紙が届きました～

オウム（現アーレフ）の原点となる坂本一家惨殺事件。私の生活圏そのものが、この事件とかかわり深く今も頭から離れる事が有りません。私が夕刻から週2回稽古に出かける合気道場が横浜法律事務所の手前のブロック（区画）にあり、あの10月31日教団の幹部らが車で乗りつけ、坂本氏を恫喝した様子を事務所を見るたびに想像します。

1989年の11月10日頃から階下の道路わきに、警察車両が交代で監視行為を始め、坂本一家の遺体発見まで続いた。

1990年に入って、坂本氏の母親が横浜駅前広場などで捜査協力のビラの配布を始めた。後日、募金と署名運動が加わった。仕事の途中、毎日この前を通りながら、疲労感の増していく老母の姿に、一度も声をかけられず、今は悔いを残しています。さらに坂本氏遺体発見の日の事、たしか夕方6時頃、1995年6月1日より1階部分にグッズ販売などを目的とする「サティアン横浜」をはじめたので、信者達の様子をみようと非常階段を駆け降りたところ、なんと応接セットで信者たちは教祖の漫画の布教映画を見ていた。TBS、サンデーモーニング最後の出演となった2000年1月8日の江川紹子氏との対談（放映は1月9日）で、道場の204号室が、一家の行方不明とは一切関係がないとの教団



被告人質問 刑事裁判の法廷で、裁判官、検察官、弁護人は、被告に対し任意の供述を求めることが可能である。公判の終盤、ほどの証拠調査が終わる場合

は斯役権や供述拒否権が認められるが、供述すれば内容の有利不利を問わざる証拠調査になれる。

公判の終盤、ほどの証拠調査が終わる場合

は斯役権や供述拒否権が認められるが、供述すれば内容の有利不利を問わざる証拠調査になれる。

公判の終盤、ほどの証拠調査が終わる場合